



SIAF

SAPPORO INTERNATIONAL ART FESTIVAL

2014

# 札幌国際芸術祭2014

参加アーティスト

平成 26 年 3 月 13 日現在

創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会

<http://www.sapporo-internationalartfestival.jp>

# 参加アーティスト \_ エキシビション

## ■企画展示「都市と自然」 Thematic Exhibition : City and Nature

A-001



《ライン・オブ・コントロール》2008  
アラリオ北京での展示風景  
Courtesy of the Artist and  
Arario Gallery

### スボード・グプタ Subodh Gupta

北海道立近代美術館

インドの現代アート界を牽引する作家。第51回ヴェネチア・ビエンナーレ(2005)、「アフター・モダン」(テート・トリエンナーレ、ロンドン、2009)、第6回アジア太平洋現代美術トリエンナーレ(2009)などの国際展に多数参加し、国立近代美術館(ニューデリー、2014)をはじめ、世界各地で個展を開催。

インドの美術大学で絵画を学び、1990年代中頃から故郷の村の儀礼に用いる品々と日用品を使ったインスタレーションや、清浄と穢れをテーマにした牛糞を使ったパフォーマンスや映像など、自身の身の回りの素材や慣習を作品化して頭角を現した。2000年以後は、よりスケールの大きな彫刻作品を手がけ、インドで使われる食器や弁当箱、バイク、タクシーなどをモチーフにして、インド社会の急速な近代化や都市化に伴う消費活動や移動など、より普遍的なテーマを扱う。

SIAF2014では、グプタの代表作の1つである《ライン・オブ・コントロール》を展示。インドで真鍮や銅などに代わって用いられるようになった安価なステンレス製の食器を使って、巨大なきのこ雲を形作る。大量に集積されたステンレス食器は、それを使う人々の存在を想起させ、インドの人口増加と工業化、近代化が生み出す巨大なエネルギーを彷彿とさせる。直接的にはインドに固有の諸問題を背景に生まれた作品だが、同時に世界各地において、日常と背中合わせになっている様々な危機的状況を象徴的な形で表現している。

A-002



《テリル》2009  
作家蔵  
Courtesy of Taka Ishii Gallery

### 畠山 直哉 Naoya Hatakeyama

北海道立近代美術館

日本を代表する写真家の一人。筑波大学芸術専門群総合造形コースにて、「実験工房」のメンバーであった写真家の大辻清司に師事。以降、各地の鉱山や炭鉱、採掘現場の爆破の瞬間などをとらえた写真群、また都市部の建築群や解体現場、地下水路を撮影したシリーズなどを発表してきた。

畠山は都市の姿を緻密かつ雄大なスケールで切り取り、人工と自然が拮抗するありさまや、写真というメディアそのもののあり方を鋭く問いかける。被写体を徹頭徹尾客体化したまなざしと、強い意志を感じさせるその写真は、見る者の心を強く惹きつける。

1997年に第22回木村伊兵衛賞、2012年に芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。国内外で多数の個展、グループ展を開催しており、第49回ヴェネチア・ビエンナーレ(2001)および第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展(2012)に参加。最新の個展「Natural Stories」(東京都写真美術館、2011)では、東日本大震災で大きな被害を受けた故郷・陸前高田の風景を含む、初期から現在に至るまでの作品を展覧した。

今回は北海道立近代美術館で、ドイツの旧炭鉱跡地を撮影した「Zeche Westfahlen I/II Ahlen」(2003)と、フランスの炭鉱跡地の都市と自然を写した「Terrils」(2009)2つのシリーズから作品を紹介する。かつて繁栄を極めた土地が社会経済の変遷によって衰退、または別の発展の道をたどり、長い時間を経て自然に還るかのようなその姿は、道内に点在する炭鉱跡地と重なりつつ、北海道ひいては日本近代化の歴史を思い起こさせる。

A-003



《参考作品》  
《Vanished Tree》2012  
ヴェルクシャウ・シュビネライ(ライプ  
チヒ、ドイツ)での展示風景  
© Youki Hirakawa

### 平川 祐樹 Youki Hirakawa

札幌芸術の森美術館

平川は、時計では測ることのできない、ある場所やものに固有の時間の流れを、映像や写真、またそれらを組み合わせたインスタレーションによって表現する。燃える蝋燭、凍った葉などを一点からとらえたモノクロの映像では、静的で硬質な画面の中で、時間の痕跡がまるで純化した結晶のように切り取られる。最近では、展示を行う土地についての調査とフィールドワークに基づいて制作を行うことも多い。現地で入手した素材をモチーフにしたインスタレーションは、より具体的に場や事物の記憶を呼び覚まし、鑑賞者はある物語を辿るかのよう、それらの、あるいは自らの時間と向かい合う。

2011年以降ドイツに活動の拠点を移し、精力的に作品の制作・発表を行っている。最近の主な個展に「眠りにつくまで」(みのかも文化の森、岐阜、2013)、「SILENCE OF NATURE / NATRUE OF SILENCE」(アカデミー・シュロス・ソリチュード、シュトゥットガルト、2013)、グループ展にあいちトリエンナーレ2013、「Stranger」(国立台湾美術館、台中、2013)などがある。

SIAF2014では、札幌芸術の森美術館で新作の映像インスタレーションを発表予定。昨年平川は札幌を訪れ、真駒内公園で切り株の調査と撮影を行った。かつてそこにあったであろう木の幹と、それが消失したことによって現れた空の穴。その痕跡が複数展示されることで、展示室に「消失した森」が出現する。手つかずの自然である原生林と、都市化によって生まれた公園という人工の自然の対比を背景に、都市と自然の相互関係ならびに札幌開拓の歴史を浮き彫りにする。

A-004



《メランコリア》1989  
福岡市美術館での展示風景  
福岡市美術館蔵  
Photo: 山崎信一

### アンゼルクム・キーファー Anselm Kiefer

北海道立近代美術館

現代のヨーロッパを代表する作家の一人。大学で法律を学んだのち美術に転じ、ヨーゼフ・ボイスらに師事した。1969年、ヨーロッパ各地でナチスの敬礼のポーズを取る自分自身を撮影した一連の写真「占領」を発表、物議を醸した。1980年代以降は、鉛、砂、向日葵、糞、写真、本など多様な素材を用いた絵画や彫刻、インスタレーションなどの大作を数多く発表。1984年にデュッセルドルフ、パリ、イスラエルで個展、好評を博す。1999年高松宮殿下記念世界文化賞・絵画部門受賞。2005-2007年サンフランシスコ近代美術館ほか北米巡回の回顧展開催。

キーファーの作品は、戦後ドイツが直視しなければならない負の歴史を呼び覚ましつつ、ドイツ固有の歴史を超えて現代人に近代史の内省を促し、我々の心を揺さぶる。一方で作品の多くには、神話や旧約聖書、ユダヤの神秘思想であるカバラなどにちなんだ題名がつけられ、現実の歴史と相まって重層的な解釈を導く。

SIAF2014では、キーファーの作品の中で「原初の物質」として象徴的に用いられる鉛を主要な素材とし、戦闘機の形をした《メランコリア》と様々な歴史と記憶を喚起させる《ジークフリートのブリュンヒルデへの困難な道》を札幌で初めて紹介する。キーファーの壮大なスケールの作品は見る者を圧倒し、普遍的な人間の本质についての再考を迫る。

# 参加アーティスト \_ エキシビション

## ■企画展示「都市と自然」 Thematic Exhibition : City and Nature

A-005



《危機の中の芸術家の肖像》1976  
国立国際美術館蔵  
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo,  
2014

### 工藤 哲巳 (1935-1990) Tetsumi Kudo

北海道立近代美術館

大阪に生まれ青森と岡山で少年・青年期を過ごした工藤哲巳は、東京藝術大学在学中から作品の発表を行い、1950年代末から「反芸術」運動の代表的な作家の一人として、読売アンデパンダン展などで世間の注目を浴びた。1962年に渡仏して以来、1980年代半ばまで約20年間はパリを拠点とし、文明批評的な視点と科学的思考に基づく作品を発表した。近年、フランスやアメリカの美術館で回顧展が開かれるなど、国内外における戦後日本美術史再検証の潮流とともに、再評価の機運が高まっている。2013年から2014年にかけて、日本で20年ぶりの包括的な大回顧展「あなたの肖像—工藤哲巳回顧展」が、国立国際美術館、東京国立近代美術館、青森県立美術館を巡回。

パリ時代から活発に行われたハプニングなどの挑発的な身体表現と共に、工藤は特に1970年代前半まで、環境汚染や原子力、性といった、科学の進歩と人類の生存を懸けた生態系の根源的な問題やタブーをテーマに精力的な制作実践を行い、ヨーロッパでの評価を確立した。近代ヨーロッパの人間中心主義を批判し、現代社会における問題を予見していたかのような工藤の作品は、ややグロテスクともいえるその作風と相まって、今日強烈な存在感を放つ。

SIAF2014では、「都市」に焦点を当てた北海道立近代美術館で、近代化に対する批評精神が色濃く看取される1968年から1970年代の立体作品を中心に展示予定。

A-006



《参考作品》  
《ヴァルト・アウス・ヴァルト (林による林)》  
2010  
個人蔵  
Photo: Osamu Watanabe

### 栗林 隆 Takashi Kuribayashi

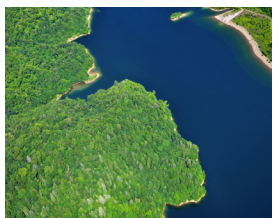
札幌芸術の森美術館

武蔵野美術大学を卒業後、渡欧。ドイツのクンストアカデミー・デュッセルドルフを修了した。栗林は、人間社会や自然界にさまざまなかたちで存在する「境界線」をテーマに作品を制作している。植物、土、水など自然の素材を組み合わせた大規模なインスタレーションにより水際や山際の情景をつくりだし、観客はその内部に取り込まれるように、あるいは俯瞰するように境界線の両側の世界を体感する。作品にしばしば登場するペンギンやアザラシといった動物は、水中と陸上を行き来し境界線を象徴する生き物として用いられ、ユーモラスな作品の道しるべ役も果たす。

シンガポール国立博物館(2007)、ソウル・ピヨンドミュージアム(2011)での個展をはじめ、第1回シンガポール・ピエンナーレ(2006)など国際展への参加多数。国内でも「ネイチャー・センス展」(森美術館、東京、2010)ほか、多くのグループ展に参加している。2012年に個展「WATER >|< WASSER」を開催した十和田市現代美術館には、《ザンブランド》(2006)が恒久設置されている。

今回は、木を原料とする和紙によって作られた白い林《ヴァルト・アウス・ヴァルト (林による林)》(2010-)を、札幌芸術の森美術館がもつ空間の特性にあわせて再構成する。日本的な空間の間仕切りなどに見られる狭間や、レイヤー構造の概念によって、和紙の林が思いもよらない視点から観客の前に開ける。それは北の大地を彷彿とさせながら、自然と人工の境界線に立つ人間の存在について、ふと立ち止まって考える機会を我々に与えてくれるだろう。

A-007



《JP-01 SPK》2014  
作家蔵  
Courtesy of TARO NASU  
© TAIJI MATSUE

### 松江 泰治 Taiji Matsue

札幌芸術の森美術館

松江は世界各地の「風景」を「地表」として捉え、「地球の表面のサンプルを収集する」というテーマのもと、一貫したスタイルで撮影を続けてきた。そのストイックな姿勢はしばしば「地名の収集」とも言及され、独特のスタイルとして認知されている。松江は1991年より、順光のもと地表を精密かつ均質に写しとった作品スタイルを完成させ、自然景の地表を捉えALPSなどの地名を付した「gazetteer」(地名辞典の意)シリーズと、タイトルにシティ・コードが付けられた「CC」シリーズを発表してきた。初期にはモノクロ写真(1991-)として作品を発表し、その後カラー写真(2005-)や松江自身が「動く写真」と呼ぶ映像作品(2010-)を制作するなど、新たな技法を取り入れながらシリーズを展開している。

SIAF2014では、昨年の夏、秋、そして今冬に札幌で撮り下ろしたばかりの新作の写真群を、その写真をなめるようにスキャンして制作された映像作品と共に展示予定。松江の作品は上空から見た札幌の「都市と自然」を写し出し、それぞれのテーマに焦点を当てた2つの美術館を接続しながら、札幌の都市風景について考察するうえで私たちに新たな視座をもたらす。

A-008



《 鈴 》2013  
Courtesy of the Artist

### 三原 聡一郎 Soichiro Mihara

札幌芸術の森美術館

世界へ開かれた芸術実践を行うため、「いま、ここ」を問いかけながら、多様なメディアテクノロジーを用いたシステムを作品として提示している。2011年より、この社会を成立させてきた近代以降の枠組みを超える試みとして「空白のプロジェクト」を展開中。現在、バイオテクノロジー考察のため、オーストラリアのバースにあるバイオアートラボ「SymbioticA」に滞在中。そのほか、触覚研究にアーティストとして携わり、「テクニカル」という普及活動プロジェクトにも参加中。近年の主な個展に「the world filled with blanks」(クンストラウム・クロイツベルク・ベタニエン、ベルリン、2013)、「空白の界」(關渡美術館、台北、2013)、グループ展に「SOUNDART—sound is a medium of art」(ZKM、カールスルーエ、2012-2013)、「OPEN SPACE 2012」(NTTインターコミュニケーションセンター [ICC]、東京、2012)、「Simple Interaction—soundart from japan」(現代美術館、ロスキレ、2011)、「ISEARUHR2010」(ドルトムント・クンストフェライン、2010)など。

本展では、札幌芸術の森敷地内に移設された旧有島武郎邸の2階に《 鈴 》(2013)を展示。ガラスドームに内蔵された放射線感知回路が、人間が本来知覚できない自然及び人工の放射線を感知したときに、ドームに包まれたガラスのベル(風鈴)が鳴る作品。風鈴は古来、邪気を払うために吊るされたのが起源という。《 鈴 》はその微細な音によって、自然と科学の不確定性と、知覚できない存在を顕在化させる。



# 参加アーティスト \_ エキシビション

## ■企画展示「都市と自然」 Thematic Exhibition : City and Nature

A-009



〈参考作品〉  
《そらみみみそら》2005  
Photo: HATAKEYAMA Takashi  
© MIYANAGA Aiko  
Courtesy of Mizuma Art Gallery

### 宮永 愛子 Aiko Miyanaga

札幌芸術の森美術館

靴、時計、玩具、鍵といった日用品をナフタリンでかたどってアクリルケースにおさめた作品や、海や川の水から抽出した塩を結晶化したインスタレーションなど、時間とともに変化する作品で知られる。たとえばナフタリンは常温で昇華し、徐々にケース内で結晶化するが、かたちは消失してもその構成要素と質量を保ったまま変化を続けている。そうした宮永の作品は、美しい儚さを宿すと同時に、そこに封じ込められた時間がまとう気配を描き出し、見る者の記憶に深く働きかける。近年の宮永の仕事は、見えないところで繋がりに常によりよく世界のあり方を見つめながら、不均衡さのなかにある調和を顕在化させる試みへと、さらなる広がりを見せている。

主な個展に「house」（ミヅマアートギャラリー、東京、2013）、「宮永愛子：なかそら-空中空-」（国立国際美術館、大阪、2012）、グループ展に十和田奥入瀬芸術祭（2013）、あいちトリエンナーレ2010など。日産アートアワード2013グランプリ、第22回五島記念文化賞・美術新人賞（2011）受賞。今回宮永は、札幌の重要な水脈、豊平川上流にある地下深部から湧出する水の存在に着想を得て、陶器によるサウンド・インスタレーション《そらみみみそら》の新作を制作する。いつ聞こえのともしれない微細な貫入（かんにゅう）の音を澄ますことで、古くから札幌を潤してきた水の由来と都市化の歴史、そして過去から現在への時間の流れが層を織り成す作品となる。

A-010



〈参考作品〉  
《Fog Sculpture #47636 “風の記憶”》  
2013  
豊田市美術館での展示風景  
Photo: 谷川寛

### 中谷 芙二子 Fujiko Nakaya

札幌芸術の森美術館

1970年の大阪万博で、ペプシ館のドーム全体を人工霧で覆う世界初の「霧の彫刻」を発表。以来、世界各地の美術館、公園、劇場、都市空間などで霧を使い、環境と呼応するインスタレーションやパフォーマンスを手がける。恒久施設14カ所を含む全作品数は50を超える。代表作に国営昭和記念公園（柱状水の森《霧の森》（東京、1992）、横浜トリエンナーレ（2008）、第18回シドニー・ビエンナーレ（2012）など。最新作にパリの共和国広場を人工霧で埋めた《Freedom Fog》（2013）がある。

一方で1971年からコミュニケーションをテーマとするビデオ作品を制作。1972年には有志と「ビデオひろば」を結成、1980年には東京原宿に国内外のビデオ作品を紹介する「ビデオギャラリー SCAN」を開設するなど、日本のビデオアート界のパイオニアとしても知られる。

今回は札幌芸術の森美術館の中庭で、美術館壁面に出現する人工霧を滝に見立てた新作《FOGSCAPE #47412》を発表する。中谷が生み出す霧の環境は、美術館の建物を包み込み、周囲の自然と一体化しながら様々な表情を見せる。訪れた人々は、変幻する風景の中で自らの五感を通して人と自然と都市の関係について改めて思いを馳せることだろう。

A-011



「雪の結晶・星状六花」  
（十勝岳・白銀荘での第1回観測で  
1933年12月22日撮影ガラス乾板）  
加賀市中谷宇吉郎雪の科学館所蔵

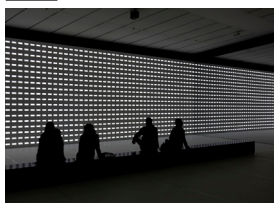
### 中谷 宇吉郎 (1900-1962) Ukichiro Nakaya

北海道立近代美術館

「雪は天から送られた手紙である」の名言で知られる実験物理学者。東京大学で生涯の師と仰ぐ寺田寅彦に出会い、その指導のもと、火花放電の研究を行う。1928-1930年ロンドンに留学後、北海道大学に赴任。雪の結晶の美しさに魅せられ、雪の研究を始める。十勝岳の山小屋で天然雪の顕微鏡写真を約3,000枚撮影し、それを基に雪の結晶の分類を行った。1936年に世界初の雪の結晶の人工製作に成功。雪の結晶形とその生成条件の関係を明らかにした。また、凍上、着氷など時代が求める寒冷地特有の問題の解決にも尽力した。1952年にシカゴの雪氷凍土研究所に招聘され、氷の単結晶の研究に従事。1957年、国際地球観測年のグリーンランド遠征隊に参加して以降、毎年夏に同地へ赴き氷の研究を続けた。グリーンランドでは、数十万年にわたって降雪が堆積・氷化した氷床を掘削し、掘り出したアイスコア（柱状氷）から地球環境や気候の変動を探る研究が行われた。随筆家としても知られ、『冬の華』、『雪』をはじめ多くの優れた随筆を著す。また科学映画の製作にも早くから携わった。

SIAF2014では、中谷の研究の礎となった火花放電の写真、並びに天然雪と人工雪の写真を膨大な研究資料から厳選し、芸術的観点から評価を行う。自然に常に謙虚に向き合い、その秘密を解明すると同時に人々に役立つ研究を目指した中谷の科学的な眼差しは、現代に生きる私たちに様々な示唆を与えてくれる。

A-012



〈参考作品〉  
《unidisplay》2012  
Museum für Modern Kunst  
Frankfurt am Main (MMK) での  
展示風景  
Photo: Axel Schneider  
©Courtecy Galerie EIGEN+ART  
Leipzig/Berlin / JASPAR, Tokyo,  
2014

### カールステン・ニコライ Carsten Nicolai

北海道立近代美術館

札幌芸術の森美術館

視覚芸術の活動とならび、アルヴァ・ノート (alva noto) 名義で電子音楽を制作発表しているドイツのアーティスト。1999年にレーベル raster-noton を設立し、多様な実験音楽の作品をリリースする傍ら、坂本龍一、池田亮司とのコラボレーション「cyclo」や、他のミュージシャンとの共演でも国際的に知られる。2005年にドイツ国内2カ所で開催された包括的な個展の他、ドクメンタX（1997）、第49回・50回ヴェネチア・ビエンナーレ（1999、2001）など国際展への参加多数。2012年から2013年にかけて、大規模な映像インスタレーション《unidisplay》がモントリオール、ミラノ、フランクフルトを巡回した。国内では山口情報芸術センター [YCAM] での個展（2010）のほか、越後妻有アートトリエンナーレ（2003、2012）、第4回ヨコハマトリエンナーレ（2011）などに参加している。2014年文化庁メディア芸術祭アート部門大賞受賞。アーティストックな形態とアプローチの統合を目指すニコライは、グリッド、コード、エラー、ランダムや自己生成構造といった科学的なシステムや数学的パターン、記号論を応用する。その実践は、《universe》《uniscopes》（2010）から《unidisplay》を経て、このたび発表される新作《unicolor》へと発展してきた。札幌芸術の森美術館の壁面に投影される幅約16mの巨大な映像は、鏡の効果によって無限に拡張する宇宙のような空間を創造し、ジョセフ・アルバースやヨハネス・イッテンなど美術史上の先人たちの色彩研究を想起させながら、我々の色彩の知覚を洞察する。また、北海道立近代美術館でも、中谷宇吉郎による雪の結晶の研究に感銘を受けて制作された人工雪の作品《snow noise》を展示。

# 参加アーティスト \_ エキシビション

## ■企画展示「都市と自然」 Thematic Exhibition : City and Nature

A-013



〈参考作品〉

壁面：《雄別炭礦病院屋上遺構》2009  
床面：《北海道炭礦汽船真谷地炭礦電力所遺構》1998

「岡部昌生フロッターージュ・プロジェクト雄別炭礦を掘る」展での展示風景  
(釧路市立美術館、2009)

Photo: 港千尋

### 岡部 昌生 Masao Okabe

北海道立近代美術館

都市に内在する不可視の記憶や歴史の痕跡を写し取るため、岡部は1977年よりフロッターージュ（擦り出し）という手法を用いて表現を始める。1979年にはパリのイヴリ・シュルセヌに滞在し、169点から成る《都市の皮膚》を制作。1980年代後半より広島原爆の痕跡を作品化するプロジェクトを開始し、2007年のヴェネチア・ビエンナーレにおいて結実化。その直接的かつ身体的な実践に対して世界的な評価を受けた後、現在も継続的に広島や福島といった都市に関わり続けている。1988年、オーストラリアのヌーサで市民と150mに及ぶ街路のフロッターージュを行って以来、人々とのコラボレーションやワークショップも積極的に実施するほか、国内外の各都市で制作・展覧会活動を展開している。主な展覧会やプロジェクトは「ART for the SPIRIT 永遠へのまなざし」（北海道立近代美術館、2001）、「シンクロシティ同時生起」（広島市現代美術館、2005）、第52回ヴェネチア・ビエンナーレ美術展日本館「わたしたちの過去に、未来はあるのか」（2007）、「タスマニアのヒロシマ」（MONA タスマニア、2011）、「南相馬の記憶と記録」（南相馬市、2013）など多数。

SIAF2014では、北海道立近代美術館に《YUBARI MATRIX 1998-2014》を展示。床に敷き詰められたドロ잉の全面を強化ガラスで覆い、その上を来場者が歩いて鑑賞する展示を試みる。鑑賞者は作品の上を歩くことによって岡部の制作を体験すると同時に、炭鉱の遺構を身体的に経験することで、私たちの現代の暮らしを支える近代以降のエネルギーの変遷と都市化の歴史に思いを馳せることとなる。

A-014



〈参考作品〉

《アルミニウム・クラウド-6 モジュール》2013  
《エスター・シッパ（ベリリン）》での展示風景

Photo: © Andrea Rossetti  
Courtesy of the Artist and Esther Schipper, Berlin

### トマス・サラセーノ Tomás Saraceno

札幌芸術の森美術館

蜘蛛の巣、泡、雲など有機的なイメージを参照しながら、ミクロの生態系からマクロの宇宙までを視野に入れ、旺盛な探究心で実践的かつ詩的な作品を制作する作家。サンパウロ・ビエンナーレ（2006）、第53回ヴェネチア・ビエンナーレ（2009）など主要な国際展での発表のほか、世界各地で屋内外を使った大規模なインスタレーションで注目を集める。

代表作「クラウド・シティ」のシリーズは、雲のように空中に浮かぶモジュール構造の居住空間から成る空中都市の創造を目指す。幼い頃から移動の多い生活を送ってきたサラセーノは、移動可能で境界線のない住環境に高い関心を抱く。それが宇宙空間での居住を可能にするテクノロジーへの挑戦と見事に結びつき、異なる背景をもつ人々の共存を描く近未来的な展望を示す作品へと昇華してきた。

SIAF2014では、この「クラウド・シティ」のモジュールと、種類の異なる複数の蜘蛛の巣でできた作品を展示する。後者は、立体的な蜘蛛の巣の形が、フィラメント（繊維）状に集まって形成された宇宙の幾何学的なパターンと相似しているという研究から着想を得たプロジェクトの一環である。自然界では見ることのないハイブリッドな蜘蛛の巣を創り出すことで、宇宙生成のメタファーを可視化しながら、同時に社会生活における協力、共存、コミュニケーション、ネットワークなどをめぐる様々な問題を私たちに投げかける。

A-015



《風に聴く》1986

札幌芸術の森美術館蔵

### 砂澤 ビッキ (1931-1989) Bikky Sunazawa

札幌芸術の森美術館

旭川市に生まれ、民芸風彫刻に携わっていたが、1953年に鎌倉に移住。独学で絵画を学び、モダンアート協会や読売アンデパンダン展に出品。澁澤龍彦と交友を深め、抽象的、シュルレアリスム的な絵画を制作。やがて彫刻にも本格的に取り組み、1958年にはモダンアート協会の彫刻部で新人賞を受賞。翌年旭川に戻り、1967年には札幌にアトリエを移すが、1978年に音威子府（おといねっぶ）に移住し、精力的に制作活動を行った。

若い頃から始めた木彫が、砂澤の創作活動の中心となる。有機的なフォルムで生命力あふれる木彫は、繊細な小品からモニュメント的な大作まで多岐に渡る。晩年は「風」をテーマにダイナミックな作品を制作。札幌芸術の森野外美術館に設置されている《四つの風》は、高さ5mを超えるエゾマツ4体を用いた砂澤の生涯で最大の作品であり、それに自然が「風雪という名の鑿」を加えていく。風を「四頭四足の獣」と詩に詠んだように彼は風と4という数を深く関連づけている。同じくエゾマツを彫り出した《風に聴く》においても、木精を思わせる4本の柱が連立している。

SIAF2014では、札幌芸術の森美術館で、一本のナラの木から彫り出された《神の舌》と晩年の代表作《風に聴く》が観客を迎える。木という素材と向き合い、直彫りすることで触覚的にその本質を引き出す砂澤の造形は、祈りにも似た自然への畏怖の念を想起させる。

A-016



《Ice Core》2005

作家蔵

「雪と氷との対話」展（ラトビア国立自然史博物館、2005）委嘱作品  
作品制作協力：北海道大学低温科学研究所、国立極地研究所、本堂武夫、宮本淳、若濱五郎、中谷美二子

### 高谷 史郎 Shiro Takatani

北海道立近代美術館

京都市立芸術大学在学中の1984年、高橋梯二をはじめとする同大学の学生が中心となって結成したアーティストグループ「ダムタイプ」に、創設メンバーとして参加。以来、ダムタイプのパフォーマンス、インスタレーションの制作に携わり、映像、照明、グラフィック、舞台装置デザインなどを幅広く手がけてきた。

並行して、1998年より個人でも制作を開始。プリズムやレンズを用いた作品、また高度なテクノロジーに裏打ちされた映像インスタレーションやパフォーマンス作品を発表している。舞台公演作に「明るい部屋」（テアター・デア・ヴェルト、ドイツ、2008）、「CHROMA」（びわ湖ホール、滋賀、2012）がある。高谷の作品には、空間と時間の関係や自然現象への深い洞察、光学的な現象の知覚への一貫した関心を認めることができる。それを総覧できる初の企画展「明るい部屋」が、2013年から2014年にかけて東京都写真美術館にて開催された。

多ジャンルにわたるアーティストとの共同作業も多く、近年では中谷美二子との《CLOUD FOREST》（山口情報芸術センター [YCAM]、2010）や坂本龍一・野村萬斎との「LIFE-WELL」（YCAM、2013）などがある。今回は北海道立近代美術館にて、科学者・中谷宇吉郎へのオマージュとして制作した映像インスタレーション《Ice Core》（2005）を出品するとともに、中谷の研究資料である雪の結晶、火花放電の写真の展示監修も手がける。また、パフォーマンス「CHROMA」を道内で初公演する。

## 参加アーティスト \_ エキシビジョン

## ■企画展示「都市と自然」 Thematic Exhibition : City and Nature

会場構成

A-017



〈参考作品〉  
青木淳建築計画事務所  
「青森県立美術館」2005  
Photo: Daici Ano

## 青木 淳+丸田 絢子 Jun Aoki + Ayako Maruta

北海道立近代美術館 ほか

## ■青木 淳

磯崎新アトリエ勤務(1983-1990)を経て、1991年青木淳建築計画事務所を設立。独創的な敷地条件の読解と知的な空間操作を駆使した設計によって、国内外から高い評価を受けている建築家。初期代表作には、「馬見原橋」(1995/第8回くまもと景観賞を受賞)、「潟博物館」(1997/日本建築学会作品賞受賞)などがある。また、奥行きのない敷地を逆手にとり、モアレの視覚的効果によって既存の商業施設の意匠概念を刷新した「ルイ・ヴィトン名古屋栄店」(1999)は、以後世界各地のルイ・ヴィトン店舗のスタンダードにまでなった。2000年の青森県立美術館設計競技では、白塗りの煉瓦を用いたリノベーション的な外観と、可塑的なボリューム・導線をもった迷宮のような展示室という斬新な提案により、最優秀賞を受賞(2006開館)。「現代美術への視点―連続と侵犯」(東京国立近代美術館、2002)にアーティストとして参加して以降、建築と美術の間を行来する創作活動を展開している。2009年に個展を開催(TARO NASU、東京)。あいちトリエンナーレ2013では画家の杉戸洋と「スパイダース」を結成、名古屋市美術館の入口の表裏を逆転させ、黒川紀章建築そのものを読み替える大胆なプロジェクトを実現させた。主著に『青木淳 Jun Aoki Complete Works 1』(INAX出版、2004)、『青木淳 Jun Aoki Complete Works 2』(INAX出版、2006)、『原っぱと遊園地』(王国社)。

A-018



〈参考作品〉  
《Suspended Figure》2008  
DIESEL DENIM GALLERY  
AOYAMAでの展示風景  
Photo: 首藤幹夫

## ■丸田 絢子

2003年から2006年まで青木淳建築計画事務所に勤務後、2006年丸田絢子建築設計事務所を設立。以降、商業施設のインテリアデザイン、展示会場の空間デザイン、またインスタレーションなど、建築にとらわれず多岐にわたる分野で活躍、注目を集めている。2009年札幌市に事務所を移転。丸田のデザインは「集合・配列・自由度」をテーマに、見慣れた素材を用いて見たこともない空間を作り出す。正方形のスチールパネルとマグネットピースの配列と組み合わせによって、壁面の機能とデザインを自在に変えられるデザインを採用した「デイリー・フィッシュ・ストア」(東京、2007)で、グッドデザインアワード2007およびJCDデザインアワード2007新人賞受賞。東京・青山のDIESEL DENIM GALLERY内のインスタレーションとして手がけた《Suspended Figure》(2008)では、天井から吊るされた工事現場用のランプとケーブルの集合体が、美しいアーチと柱をつくり出した。2009年には個展「Circus」(PRISMIC GALLERY、東京)を開催。SIAF2014では青木淳と共に、北海道立近代美術館常設展示室の空間構成を手がける。



## 参加アーティスト \_ エキシビション

### ■チ・カ・ホ特別展示「センシング・ストリームズ」 Sensing Streams

A-019



マルコ・ペリハン

### A.P.I. (アークティック・パースペクティブ・イニシアティブ)

A.P.I. (Arctic Perspective Initiative)

札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ)

マルコ・ペリハンとマシュー・ビーダーマンにより 2006 年に設立された国際的な非営利団体。極地圏に暮らす様々な人々のためにオープン・ソース技術やコミュニケーションのインフラを創造することを目的に A.P.I. は、現地の人々と共同で、オープンソース技術を活用したシステムの紹介や、伝統文化と科学技術を結びつける持続可能なシステムの提案など、広義の社会活動を展開している。歴史的には多様な原住民が移動し、現在はカナダや北欧、ロシアなどの国々に分断された「極地圏」というトポスを、文化・政治・経済・社会・環境というさまざまな側面から情報技術を通して照射していく批評的かつ実践的なものといえる。

A-020



マシュー・ビーダーマン

A-021



アンティエ・グライエ=リパッティ (AGF)

### アンティエ・グライエ=リパッティ (AGF)

Antye Greie-Ripatti aka AGF

札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ)

1969 年旧東ドイツ生まれ、フィンランド・ハイルオト島在住。AGF、ポエムプロデューサーの通称で、作詞家、作曲家、詩人、キュレーター、エディターとして知られる。言語や音声、サウンドの関係性に着目し、創作を行う。デジタル技術の芸術的な探求からアーティストとしての活動を始め、2001 年に初めてのアルバム『Head Slash Bauch』を発表。このアルバムでは、HTML 言語やソフトウェアの断片を電子的な詩や解体された音に変容させた。オーディオビジュアルライブパフォーマンス、デジタルコミュニケーション、サウンドインスタレーション、また映像作品や劇場とのコミッションワークを発表している。

A-022



ジョン・ビョンサム

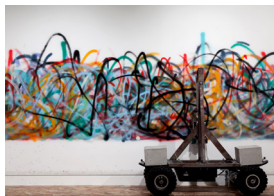
### ジョン・ビョンサム Byeong Sam Jeon

札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ)

アートと科学の領域を横断し国際的に活躍するメディア・アーティスト。テレマティクス文化、実用インタラクティブデザイン、ロボットアート、トランスヒューマニズム、インタラクティブ・コミュニケーションデザインに関わる。これまで SIGGRAPH (米国)、ISIMD (トルコ)、AsiaGraph (中国)、LIFE (ロシア)、ArtBots (アイルランド)、SALON (キューバ)、Netfilmmakers (デンマーク)、Siggraph ASIA (シンガポール)、TMCA (韓国) などで作品を発表。インターネットで各地をつなぎ即興演奏を行う代表作《Telematic Drum Circle》(2007) は、これまで 59 カ国 30 万人以上の参加者を集めている。

※ 札幌市姉妹都市枠で、大田 (テジョン) 広域市より参加

A-023



〈参考作品〉  
《SENSELESS DRAWING BOT》2011  
Photo: Yohei YAMAKAMI

### 菅野 創 / yang02 So Kanno / yang02

札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ)

菅野創：情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) メディア表現研究科メディア表現専攻修了。電子回路やプログラミングを用いて、複数のテクノロジーの特性を結びつけることにより新たな表現を生むことを目指し作品を制作している。作品を用いてのライブや、キット化、ワークショップも行っている。

yang02：1984 年、神奈川県生まれ。2009 年多摩美術大学大学院デザイン専攻情報デザイン研究領域修了。身体性の伴った文字表現や、公共性などを主なキーワードに、デジタルメディアを基盤とした研究・制作活動を展開。

2011 年に共同制作を開始した《SENSELESS DRAWING BOT》が 2012 年文化庁メディア芸術祭アート部門にて新人賞を受賞。その後、「Mediacity Seoul 2012」(韓国、ソウル) や mfuru (スロベニア、マリボル) など、国内外のフェスティバルや展覧会に多数参加。同年、《SENSELESS DRAWING BOT #2》を「TRANS ARTS TOKYO」(東京、神田) にて再び共同で公開制作。2013 年には同作品の展覧会「JIZZED IN MY PANTS」を 3331 ギャラリー (東京、神田) にて開催。その後も、人間の身体性を感じさせつつも、シンプルな仕組みで複雑な結果を生む「Bot」を基本コンセプトに共同制作を継続しており、SIAF2014 にて新作のドローイングマシンを発表予定。

## 参加アーティスト \_ エキシビション

## ■チ・カ・ホ特別展示「センシング・ストリームズ」 Sensing Streams

A-024



毛利 悠子

## 毛利 悠子 Yuko Mohri

札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)

1980年、神奈川県生まれ。美術家。日用品やジャンクと機械部品を再構成した立体物を展示環境に寄り添わせることで、磁力や重力、光、温度など、目に見えない力をセンシングするインスタレーション作品を制作している。主な個展に2012年「サーカス」(東京都現代美術館ブルームバーグ・パヴィリオン)、2013年「おろち」(watingroom)、主なグループ展に、2012年「アートと音楽—新たな共感覚をもとめて」(東京都現代美術館)、「アノニマスライフ—名を明かさぬ生命」(NTTインターコミュニケーション・センター[ICC])、2013年「メディアアートキッチン」(インドネシア国立美術館、ジャカルタ)など国内外多数。東京の駅構内の水漏れの対処現場のフィールドワーク「モレモレ東京」主催。

A-025



パク・ジョンソン

## パク・ジョンソン Jungsun Park

札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)

韓国・大田(テジョン) 広域市在住のメディアアーティスト。1997年ソウル大学校彫刻科を卒業後、ドイツ・シュトゥットガルト公立美術アカデミーで彫刻を専攻。2013年韓国・KAISTでカルチャーテクノロジーで修士号を取得、現在は、博士課程に在籍。2002年より、韓国国内での展覧会に参加。「House of Yi Eungnoでの特別展」(ホンソン郡、2012)、「Daein Market Art project」(光州、2009)、「Mosaic City」(大田市立美術館、2007)、「Media 未来語」展(テジョン市民ホール、2002)など。映像作品《Woman On The Beach》(2006)、《The President's Last Bang》(2005)、《Scandal》(2003)、《On the Occasion Of Remembering The Turning Gate》(2002)などの制作に参加、個人では短編映像作品として《Dance》(2009)、《Abandoned House》(2007)、《Nosebleed》(2001)、《White Mask Red Gloves》(2000)を発表している。

※札幌市姉妹都市市枠で、大田(テジョン) 広域市より参加

A-026

©2011 Kab Inc.  
Photography by Rama

## 坂本 龍一 + 真鍋 大度 Ryuichi Sakamoto + Daito Manabe

札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)

## ■坂本 龍一

1952年東京生まれ。東京芸術大学大学院修士課程修了。1978年『千のナイフ』でソロデビュー。同年、細野晴臣、高橋幸宏と『YMO』を結成。散開後も、音楽・映画・出版・広告などメディアを越え活動。1984年、自ら出演し音楽を担当した『戦場のメリークリスマス』で英国アカデミー賞他、映画『ラストエンペラー』の音楽でアカデミー賞、グラミー賞他受賞。以後、活動の中心は欧米へ。常に革新的なサウンドを追求する姿勢は世界的評価を得ている。1999年制作のオペラ『LIFE』以降、環境・平和問題に言及することも多く、自然エネルギー利用促進を提唱するアーティストの団体 artists'power の創始、森林保全団体「more trees」の創設など活動は多岐にわたっている。加えて311以降は被災地の復興支援、さらには脱原発運動にも積極的に関わっている。2006年には新たな音楽コミュニティーの創造を目指し「commons」をイベントとともに設立した。主な作品に『B-2 UNIT』『音楽図鑑』『BEAUTY』『LIFE』『out of noise』、著書に『音楽は自由にする』、共著に『縄文聖地巡礼』『いまだから読みたい本—3.11後の日本』『NO NUKES 2012 ぼくらの未来ガイドブック』など。2012年には「1996」以来待望のトリオ・アルバム『THREE』を発表。2013年1月より放送を開始したNHK大河ドラマ「八重の桜」のテーマ曲を手がけ、現在、オリジナル・サウンドトラックアルバムが好評を得ている。また、2013年は山口情報芸術センター(YCAM)10周年事業のアーティストック・ディレクターとして、2014年はSIAF2014のゲストディレクターとしてアート界への越境も積極的に行っている。1990年より米国、ニューヨーク州在住。

## ■真鍋 大度

1976年生まれ。東京理科大学理学部数学科卒業、国際情報科学芸術アカデミー(IAMAS)DSPコース卒業。ジャンルやフィールドを問わずプログラミングを駆使して様々なプロジェクトに参加。MIT MediaLab、Fabricaをはじめ世界各国でワークショップを行うなど教育普及活動にも力を入れる。子ども向けの作品やワークショップも多数。openFrameworksの開発者会議、cycling74のExpoにプレゼンターとして参加。eyeo festival、OFFF、FITC、Transmediale、EXIT、Scopitone Festivalをはじめとした海外のフェスティバルに参加。

Prix Ars Electronicaでは2009年度審査員を務め、2011年度インタラクティブ部門準グランプリ受賞。文化庁メディア芸術祭においては大賞2回、優秀賞2回、審査委員会推薦作品選定は8回を数える。2010年よりPerfumeの演出サポートを担い、ディレクションを担当した「Perfume Global Site Project」はカンヌライオンズ 国際クリエイティビティ・フェスティバル、サイバー部門にて銀賞を受賞。米Apple社の「Mac 誕生30周年スペシャルサイト」にてジョン前田、ハンズ・ジマーを含む11人のキーパーソンの内の一人に選出されるなど国際的な評価も高い。

A-027

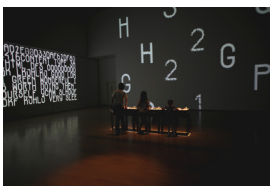
真鍋 大度  
Photo: Kazuaki Seki



## 参加アーティスト \_ エキシビション

### ■チ・カ・ホ特別展示「センシング・ストリームズ」 Sensing Streams

A-028



〈参考作品〉  
《Semitra Exhibition tFont/fTime》  
2009  
山口情報芸術センター [YCAM] での  
展示風景  
Courtesy of Ycam InterLab

### セミトランスペアレント・デザイン

Semitransparent Design

2003年活動開始。デザイナー/デバイスデベロッパー/プログラマーからなるデザインチーム。黎明期よりネットとリアルを連動するような独自のデザイン手法を確立し多くのウェブ広告を制作する。TIAA、カンヌ国際広告祭、クリオ賞、One Show、ロンドン国際広告祭、New York ADC、D&ADなど国内外の広告賞を多数受賞。2008年にインターコミュニケーション・センター (ICC) にて《No Flash Photography Allowed》のインスタレーション作品展示、2009年に山口情報芸術センター [YCAM] にて初めての個展「Semitra Exhibition tFont/fTime」、2010年にクリエイションギャラリー G8 にて個展「セミトラ展 ウェブから生まれるデザイン」、2011年にボンビドゥーセンターにてインスタレーションを展示。また、2012年には 21\_21 Design sight にて田中一光氏のためのインスタレーションを展示するなど、デジタルメディアを中心とした表現活動も行っている。2014年にはクリエイションギャラリー G8 で「光るグラフィック展」の企画に携わるなど、グラフィックデザインとスクリーンデザインを繋げるような活動も行っている。

札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ)

A-029\_2



進藤冬華  
Photo: Akihito Yamamoto

### 進藤 冬華 Fuyuka Shindo

1975年生まれ、札幌出身。札幌をベースに活動する作家である。北海道を中心としてその周辺のサハリンや東北を含めた地域の伝統的な工芸、手芸などリサーチし、その体験を基に制作を行う。北海道とその周辺地域にある多様な文化や人々の歴史、自然との繋がりに興味を持つ。道内を中心に国内、外で作品を発表。個展「物語を編む」(QSSギャラリー、2014年)、グループ展「日常の冒険」(500m美術館、2012年)など。これまで国内外のレジデンスにも参加。

札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ)

A-030



〈参考作品〉  
「ミスノチズ」より  
Photo: Keiji Tsuyuguchi

### 露口 啓二 Keiji Tsuyuguchi

1950年、徳島県生まれ。1989年にフレメン写真製作所を設立し、写真の可能性、表現方法に関する研究・実験を行う。1990年代末より、北海道の風景と歴史に着目した写真の発表を始める。1999年より撮影が開始された「地名」シリーズは、国内外で広く紹介され、パリ、ローマでの発表の後、2004年「ノンセクト・ラディカル - 現代の写真III - 展」(横浜美術館・横浜)に出展。近年では、2012年《Natural History (倉石信乃との共作)》を「SNOWSCAPE MOERE- 再生する風景 -」展に出品 (モエレ沼公園ギャラリー・札幌)、2013年「アクアライン展」(札幌芸術の森美術館)などに参加している。SIAF2014では、「ミスノチズ」と「イシカリへ」のシリーズの写真と映像を組み合わせた新作の発表を予定している。

札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ)

A-031



山川 冬樹

### 山川 冬樹 Fuyuki Yamakawa

1973年ロンドン生まれ、横浜市在住。音を介した世界と身体との関わりを探求しながら、音楽、美術、舞台芸術の分野で活動。心音など身体内部で起きている微細な活動や物理現象をテクノロジーによって拡張するパフォーマンスで、ヴェネチア・ビエンナーレ、フジロックフェスティバル、国内外のノイズ/即興音楽シーンなど、ジャンルを横断しながら、これまでに15カ国で公演を行う。また一人で同時に二つの声で歌うといわれる、アジア中央部の伝統歌唱「ホーメイ」の名手として知られ、2003年ロシア連邦トウバ共和国で開催された「ユネスコ主催 第4回国際ホーメイフェスティバル」では「アヴァンギャルド賞」を受賞。展示形式の作品にはサウンド・インスタレーション「The Voice-over (2008)」などがあり、同作品は東京都現代美術館にコレクションされている。2013年には渋谷の地下水脈についての新作サウンド・インスタレーションを発表。

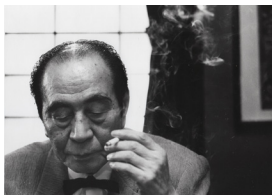
札幌駅前通地下歩行空間 (チ・カ・ホ)

## 参加アーティスト \_ エキシビション

### ■赤れんが特別展示「伊福部 昭・掛川 源一郎」展

Akira Ifukube and Genichiro Kakegawa, Two Great Men of Hokkaido

A-032



伊福部 昭

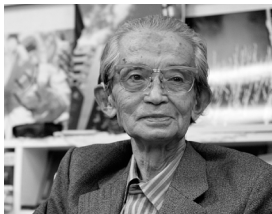
© 勇崎哲史 1997

### 伊福部 昭 (1914-2006) Akira Ifukube

北海道庁赤れんが庁舎

北海道、釧路町（現釧路市）生まれ。作曲家。ほぼ独学で作曲法を学び、民謡のフレーズを取り入れたオーケストラ曲など、日本らしい音楽を追求した。伊福部の曲に特徴的な、民族主義的で力強い曲の数々は、北海道音更町在住時のアイヌ民族との関わりに大きな影響を受けている。『ゴジラ』をはじめとする映画音楽の作曲家として、また音楽教育者としても知られるほか、雪の結晶の研究で名高い中谷吉郎が制作した科学映画の音楽も手がけている。代表作に『リトミカ・オスティナータ』、『シンフォニア・タブカーラ』など。

A-033



掛川 源一郎

© 掛川源一郎写真委員会

### 掛川 源一郎 (1913-2007) Genichiro Kakegawa

北海道庁赤れんが庁舎

北海道、室蘭町（現室蘭市）生まれ。写真家。1950年代に土門拳らのリアリズム写真に影響を受け、北海道における社会派カメラマンとして活躍した。主な著書に『アイヌの神話』『アイヌの四季』（更科源蔵との共著）のほか、『若きウタリに』『大地に生きる』『バチラー八重子の生涯』など。1991年第7回東川賞特別賞受賞。2000年から札幌市在住。2004年4月、約70年間の集大成として写真集『gen 掛川源一郎が見た戦後北海道』を出版。主な展覧会に「写真家 掛川源一郎の20世紀」（北海道立文学館、2004）など。

## 参加アーティスト \_ エキシビション

### ■ 500m 美術館企画展示「北海道のアーティストが表現する「都市と自然」 — 「時の座標軸」 — Coordinate Axes of Time: City and Nature Presented by Artists from Hokkaido

A-034



〈参考作品〉  
《Free Fall (自由落下)》2012  
「イメージフォーラム・フェスティバル 2012」での展示風景 (パークタワーホール/東京ほか)

#### 伊藤 隆介 Ryusuke Ito

札幌大通地下ギャラリー 500m 美術館

伊藤隆介は映像メディアを通じ人間の記憶の生成や共有をテーマに、サイズの喪失感を伴う映像コラージュやインスタレーションを制作する作家である。近年は主に作品のモチーフとなる場所や建造物を精密な小型模型とし、その内外部にモーターによって可動する小型カメラを仕掛け、そこに映された映像をリアルタイムで大型スクリーンに投影している。

主な展覧会として横浜での「黄金町バザール 2012」、「Art and Air」(青森県立美術館、2012)、「Back from Japan」(HPZ-Foundation、デュッセルドルフ、2012)、「Kitara 現代音楽入門 ジョン・ケージ生誕 100 年/メタミュージック (超音楽) / 音楽を越境した音楽たち」(札幌コンサートホール Kitara、2012)、「札幌ビエンナーレ プレ企画/アートから出て、アートに出よ。美術館が消える 9 日間」(北海道立近代美術館、2011)、Contemporary Japanese Avant-garde Film (サンフランシスコ現代美術館、2009)、第 3 回 福岡アジア美術トリエンナーレ 2005 (福岡アジア美術館) などがある。2011 年度札幌文化奨励賞を受賞。

今回の展示では、「都市と自然」をテーマに札幌の象徴的な場所や建造物をモチーフとした模型の制作ならびに模型内部に進入する小型カメラによる映像が画面で投影される予定。映し出された映像は、実写映像の如く見えるとともにモチーフの歴史的背景が垣間見えることだろう。

A-035



〈参考作品〉  
《奔愛 (Pon Love)》2013  
「旧住友奔別炭鉱ホッパー (三笠市)」での展示風景  
Photo: yuki naka

#### 上遠野 敏 Satoshi Katono

札幌大通地下ギャラリー 500m 美術館

上遠野敏は近年、北海道の空知地区炭鉱跡地アートプロジェクトに取り組んでいる。そのコンセプトは近代化の歴史がもたらすポジティブな側面とネガティブな側面とをアート作品を通じ顕在化させ、近代以降の私たちの暮らし方に一つの示唆を与える。自然との共生、エネルギーにおける新たな創造、インフラ整備のあり方など、北海道における、いや日本における近代化の象徴とも言える炭鉱跡地に焦点を合わせ、様々なオブジェ制作をしている。

主な展覧会として「Distant Observations Fukushima in Berlin」(ドイツ・クンストラウム・クロイツベルク・ベタニオン、2014)、「奔別アートプロジェクト 2013」(三笠市・奔別炭鉱ホッパー跡)、「夕張清水沢アートプロジェクト」(旧北炭清水沢火力発電所跡、2011)、「幌内布引アートプロジェクト」(幌内布引炭鉱跡、2009)、「FIX MIX MAX! 現代アートのフロントライン」(北海道立近代美術館、2006)、「Interaction」相互作用 (エルンスト・パーラッハ美術館、2005)、「北の創造者たち 虚実皮膜」(札幌芸術の森美術館、2003)、「北日本の 5 人作家達」(ハンブルク総合芸術館カンパナゲル、2001) などがある。

今回は、北海道空知地区の炭鉱跡地に残される素材を使用したオブジェを、500m 美術館ガラスケース内にインスタレーションする予定。

A-036



〈参考作品〉  
《Proto Landscape》2013

#### 高田 洋三 Yoza Takada

札幌大通地下ギャラリー 500m 美術館

高田洋三の作品は現実の風景写真でありながら絵画的であり、ドキュメンタリーな手法でありながら不思議と現実とは思えない。例えば近代化の波で空洞化した街や施設を覆う植物の生命力をありのままに写した作品は、太古の光景なのか、あるいは映画にみる近未来のフィクションな光景なのか判然としなない。

作品は、写真装置によって、現実の世界に含まれる虚構性を増幅させ、虚構の世界を複製するという同語反復的なプロセスにより、ナンセンスと、現実の側面が醸し出す哀しさが共存する世界をつくりだしている。その景観の特異性をもって、日常の外にある世界へ想像力を広げるように促しながら、同時にその世界に住む人々の普遍的な生活や、彼ら/彼女らの生活を規定する風土的、社会的な側面について、静かに焦点をあてているのだ。作品は単なる風変わりな景観にとどまるだけでなく、人と自然、人と社会の関係の考察へと広い射程をもったものになる。

主な展覧会として「Tokyo International photo competition」(72 Gallery/ 東京 & United photo Industries Gallery/NY、2013)、「Spheres」(Joseph Gross Gallery, Arizona、2009)、「CET 06」(White House、東京、2006)、「都心に住む」(Guardian Garden、東京、2005)、「Artists by Artists」(六本木ヒルズ、2003)、「写真 2003」(茨城県つくば美術館) などがある。2008 年から 2009 年まで文化庁新進芸術家海外留学制度を受けアメリカに滞在している。

今回は、「都市と自然」をテーマに北海道、札幌のどこでもあり、どこでもない光景やアメリカ滞在中に出会った風景を、大型印画紙で表現する。

A-037



〈参考作品〉  
《神殿 -tree-》2012

#### 武田 浩志 Hiroshi Takeda

札幌大通地下ギャラリー 500m 美術館

武田浩志はコンセプチュアルというより表現系重視のアーティストである。十代後半から巧みな技量をもつ画家としてスタートしたが、社会の流行、潮流を先験的に読む能力が長けていたことから、潮流に合致した二次創作的なオブジェやアナログ機械むき出しのキネティック・アートを試みた時代もある。それらは平面作品同様に完成度の高いものであった。その意味で武田は、情報を敏感に感じ取りアウトプットできる都市型のアーティストなのかもしれない。武田は最近、集合居住空間や要塞を思わせるミニチュアの建造物を制作している。その建造物は幾つもの空間が重なり合い増幅し複雑な構造で成立しているが、その表面は繊細なペイントの幾重にもなるレイヤーで構成され、あたかも都市や人間社会の多様性を表しているようだ。

主な展覧会として「札幌美術展 2012 パラレルワールド冒険譚」(札幌芸術の森美術館)、シェル美術賞展 2011 (代官山ヒルサイドフォーラム)、「M120 Moganshan re-used!」(莫干山路 120 号、上海、2010)、「水脈の肖像 09 ー日本と韓国、二つの今日」(北海道立近代美術館)、「雪国の華 -N 40°以北の日本の作家達-」(Vanguard Gallery、上海、2009)、「FIX-MIX-MAX! 現代アートのフロントライン」(北海道立近代美術館、2006)、「LIBRARY PROJECT」(せんだいメディアテーク、2003)、「SCHAU DER MEISTERSCHULER」(CAI CONTEMPORARY ART INTERNATIONAL、ハンブルク、2003) などがある。

SIAF2014 では、ガラスケース内に無数の建造物による都市を形成する。



## 参加アーティスト\_エキシビジョン

### ■坂本 龍一 + YCAM InterLab「フォレスト・シンフォニー in モエレ沼」 Ryuichi Sakamoto + YCAM InterLab “Forest Symphony in Moerenuma”

A-026



©2011 Kab Inc.  
Photography by Rama

#### 坂本 龍一 + YCAM InterLab

Ryuichi Sakamoto + YCAM InterLab

■坂本 龍一 → P007 参照

モエレ沼公園

A-038



〈参考写真〉

《Forest Symphony (フォレスト・シンフォニー)》2013  
写真提供：山口情報芸術センター [YCAM]

#### ■ YCAM InterLab

InterLab は、山口情報芸術センター [YCAM] に附属する研究開発チーム。主に YCAM が委嘱作品として発表するインスタレーション作品やパフォーマンス作品などの技術的な開発を行っている。また、これに関連してメディア・テクノロジーを芸術表現へ応用するための研究も行っており、国内外から研究者を招聘する共同研究などにも積極的に取り組んでいる。

## 参加アーティスト \_ エキシビジョン

### ■大竹 伸朗「時憶／美唄」

Shinro Ohtake "Time Memory / BIBAI"

A-039



大竹 伸朗  
Courtesy of Take Ninagawa, Tokyo  
© Shinro Ohtake

大竹 伸朗 Shinro Ohtake

札幌市資料館

東京都現代美術館において、3万点に及ぶすべての自作を並べ驚愕する作品群で、見る者の視覚を圧倒した大回顧展「全景」(2006)、さらに近年の光州ビエンナーレ(2010)、ドクメンタ(13)(2012)、第55回ヴェネチア・ビエンナーレ(2013)、瀬戸内国際芸術祭(2013)など数々の国際美術展に参加をした。大竹伸朗は、1955年に東京で生まれ、美術大学を休学して1970年代のある一時期を北海道別海町で過ごした。1980年代にはニューペインティングの旗手として脚光を浴び、以来、日本の現代美術を常にリードしてきた。コラージュで知られる大竹伸朗の創作の数々は、あるときは絵画であり、あるときは建造物を取り巻く風景であったりと、平面、立体という明快な区別をもたない上に、それらを取り込んで行くどん欲で残酷な時間軸も加わり、常に過程であり続ける。

### ■島袋 道浩(タイトル未定)

Shimabuku (Title undecided)

A-040



島袋 道浩  
Photo: 金 玖美

島袋 道浩 Shimabuku

会場未定

島袋道浩(1969年生まれ)は1990年代初頭より世界中の多くの場所を旅しながら、そこに生きる人々や新しいコミュニケーションのあり方に関するパフォーマンスやインスタレーション作品などを制作している。島袋道浩の行動や行為に対する「なぜ?」が生まれ、その答えを人それぞれにもたらす。またそれぞれにそれぞれの答えのあることを許すといった楽しみのある体験、自由で寛容な状況は強く人々を惹き付け続けている。近年はベルリン(ドイツ)を拠点にヨーロッパで数多く作品を発表している。パリのボンビドゥ・センター、ロンドンのヘイワード・ギャラリーなどでのグループ展や2003年ヴェネチア・ビエンナーレ、2006年サンパウロ・ビエンナーレなどの国際展に多数参加。2013年には金沢21世紀美術館やイギリス、バーミンガムのアイコン・ギャラリーで展覧を開催。2014年には、スイスのクンストハレ・ベルンやカナダ、バンクーバーのコンテンポラリー・アート・ギャラリーでの個展を予定している。

### ■田島 一成「SAPPORO PROJECT」

tajima kazunali "SAPPORO PROJECT"

A-041



田島 一成

田島 一成 tajima kazunali

札幌市内各地

写真家。パリ、ニューヨークでの10年間の活動を経て2002年より東京を拠点に活動。主な仕事に『Harper's BAZAAR』『Numero』『VOUGE』などのファッション誌、POCARI SWEAT、KEWPIE、資生堂、UNIQLOなどの広告、CM、坂本龍一などのアーティストとの仕事などがある。www.mildinc.comで過去から現在までの作品を見ることができる。

## 参加アーティスト\_パフォーマンス/ライブ

## ■高谷 史郎「CHROMA」

Shiro Takatani「CHROMA」

A-042



高谷 史郎

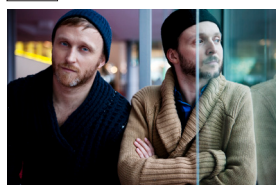
高谷 史郎 Shiro Takatani

札幌市教育文化会館 大ホール

→ P004 参照

■ Sidi Larbi Cherkaoui + Damien Jalet「BABEL」<sup>(words)</sup>

A-043

シディ・ラルビ・シェルカウイ+ダミアン・ジャレ  
© Koen Broos

シディ・ラルビ・シェルカウイ + ダミアン・ジャレ

Sidi Larbi Cherkaoui + Damien Jalet

さっぽろ芸術文化の館 ニトリ文化ホール

## ■シディ・ラルビ・シェルカウイ

1999年アンドリュウ・ウェイルのコンテンポラリー・ミュージカル「Anonymous Society」で振付家デビュー。ベルギーのカンパニー、バレエ・セー・デ・ラ・ペーの中核メンバーとして創作する一方で、その芸術観を拡げ固めるべく、様々なプロジェクトに参加し、長年の芸術パートナーであるダミアン・ジャレとの出会いを果たす。以降、20作以上の長編振付作品を創作し、バレエ・タンツ誌における最優秀振付家賞を二回、芸術哲学と文化的対話に対するカイロス賞を含む数多くの賞に選出されている。2010年春には、ダミアン・ジャレと彫刻家のアントニー・ゴームリーとの共同制作により「Foi」「Myth」に続く三部作の完結編として「Babel」<sup>(words)</sup>を発表。ローレンス・オリヴィエ賞とモスクワのベノア・デ・ラ・ダンス賞を受賞した。2011年には、手塚治虫の作品を題材に15名のパフォーマーによる「TeZukA(テヅカ)」を発表し、日本でも話題を呼んだ。

## ■ダミアン・ジャレ

1998年「The Day of Heaven and Hell」でダンスのキャリアをスタート。2000年には、ベルギーのカンパニー、バレエ・セー・デ・ラ・ペーで、シディ・ラルビ・シェルカウイの芸術パートナーとして協力関係を深める。2011年には、シディ・ラルビ・シェルカウイ「TeZukA(テヅカ)」に出演。ダンスをはじめ、彫刻家のアントニー・ゴームリーやミュージシャン、振付師、映画監督、デザイナーらと作品の合同制作をするほか、オペラや音楽ビデオの振付を手がけ、その活動は多岐にわたる。近年では、2013年5月にパリ国立オペラにおいて、シディ・ラルビ・シェルカウイとマリーナ・アブラモヴィックと共同創作した「Boléro(ボレロ)」を初演し好評を得た。

## ■ Alva Noto + Ryuichi Sakamoto「S &amp; S」

A-044

アルヴァ・ノート + 坂本 龍一  
Photo: Stanley Patzold

アルヴァ・ノート + 坂本 龍一

Alva Noto + Ryuichi Sakamoto

札幌市教育文化会館 大ホール

## ■アルヴァ・ノート(カールステン・ニコライ)

過激なまでに切り詰めたスタイルで、作曲における新たな試みを見せる新世代電子音楽家の重要人物。ソロでのリリースの他、ウルトラミニマリストであるパンソニックのミカ・ヴァイニオや日本のサウンドアーティスト池田亮司とも共作。2000年のアルス・エレクトロニカでゴールデンニカを獲得したレーベル、raster-notonの設立者の一人。

www.alvanoto.com

■坂本 龍一 → P007 参照



## 参加アーティスト\_プロジェクト

### ■参加型プロジェクト「アート×ライフ」 ART x LIFE

A-045



### COMMUNE

札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)

札幌・東京・ストックホルムを拠点に活動する、アートディレクター、デザイナー、家具リペア、エディターを中心に構成されたクリエイティブ・コレクティブ。主に企業や飲食店などのブランディングやプロデュース、広告、グラフィックデザイン、ウェブサイトなどを手がける。最近では、韓国たばこブランド「THIS」のパッケージ、スウェーデンのお茶ブランド「Yuko Ono Sthlm」のブランディング、アートプロジェクト「Ribbonesia」のアートディレクションなどの海外と関わりを持つプロジェクトや、フレンチレストラン「aki nagao」、「french panda」やカフェ「Ritaru Coffee」、美容室「KIITOS」のブランディング、野球チーム「東北楽天ゴールデンイーグルス」シーズンチケット、チームナックスの映画「N43」のグラフィック、pizzicato fiveの野宮真貴氏が北海道を旅する番組「Small Trip」ウェブサイトなど、地域に根ざしたプロジェクトを手がける。NYのOne Show Design 2012 Silver Pencil受賞、Tokyo TDC 2012 TDC賞ノミネート、SAPPORO ADC 2011 グランプリ・パッケージ部門 金賞・銅賞・会員審査賞、Graphic Design in Japan 2011 JAGDA賞・新人賞ノミネートほか。

A-046



### エキソニモ exonemo

会場未定

怒りと笑いとテキストエディタを駆使し、様々なメディアにハッキングの感覚で挑むアートユニット。千房けん輔と赤岩やえにより1996年よりウェブ上で活動開始。2000年より活動をインスタレーション、ソフトウェア、デバイス、ライブ・パフォーマンス、イベント・プロデュースなどへと拡張し、デジタルとアナログ、ネットワーク世界と実世界を柔軟に横断しながら、テクノロジーとユーザーの関係性を露にし、ユーモアのある切り口と新しい視点を持った実験的なプロジェクトを数多く手がける。国内外の展覧会やフェスティバルで活躍。2006年、「The Road Movie」がアルス・エレクトロニカのネット・ヴィジョン部門でゴールデン・ニカ賞を受賞。2010年、「ANTIBOT T-SHIRTS」がTDC賞でRGB賞を受賞。

エキソニモ  
Photo: Nonoko Kameyama

A-047



深澤 孝史  
写真提供：山口情報芸術センター  
[YCAM]

### 深澤 孝史 Takafumi Fukasawa

札幌市資料館

美術家。1984年山梨県生まれ。2008年に鈴木一郎とともにNPO法人クリエイティブサポートレッツにて「たけし文化センター」を企画。2010年個展「うんこふみふみたかふみ文化センター」。2011年より取手アートプロジェクトにて、お金のかわりに自身のとくいなことを運用する《とくいの銀行》を開始。2012年に浜松の中心市街地にて、様々な場や活動を障害物にしたイベント「しょうがいぶつマラソン2012」(浜松)を企画。また、越後妻有大地の芸術祭にて、非常事態を表現活動に翻訳する「非常美術倉庫」を制作。2013年、山口情報芸術センター10周年記念祭にて、とくいの銀行を運営しつつ、商店街のまちづくりを劇的に行った《とくいの銀行 山口》。2014年、発達のゆるやかな幼児の通所施設「根洗学園」で行ったプログラムの展覧会「おべんとう画用紙」、土で現像する写真スタジオ《photoground》(めぐるりアート静岡、2014)を制作。

A-048



### IDPW (アイパス) IDPW

会場未定

IDPW (通称: アイパス) は、「100年前から続くインターネット上の秘密結社」。現在、10数名のメンバーを中心に、インターネットを現場に降臨させるべく、パーティ/イベントの開催やアプリの開発など、様々な実験を行っている。過去の活動としては、イベント当日にGoogle Hangoutを駆使して先生を探す「サンバ教室」、各地をネットで繋ぎ世界中をビアガーデンにする企画「World Wide Beer Garden」、老人の身体感覚を体験するパーティ「K-RAW!!!」、Facebookのいいね!をワンクリックでほしい全部いいね!してくれるGoogle Chromeの機能拡張「どうでもいいね!ボタン」(第17回文化庁メディア芸術祭新人賞受賞)、Google Docs上に集う「テキスト・パーティ」、そして、インターネット的なものを現実空間で売買するフリーマーケット形式のイベント「インターネットヤミ市」などがある。

## 参加アーティスト\_プロジェクト

### ■コロガル公園 in ネイチャー Korogaru Park in Nature

A-049



〈参考写真〉  
《コロガル公園》2012  
写真提供：山口情報芸術センター  
[YCAM]

### YCAM InterLab + 五十嵐 淳

YCAM InterLab + Jun Igarashi

札幌市資料館

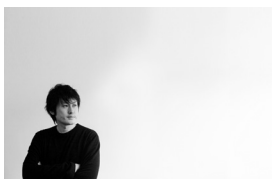
#### ■ YCAM InterLab

InterLab (インターラボ) は、山口情報芸術センター [YCAM] に内属する研究開発チーム。主に YCAM が委嘱作品として発表するメディアアート作品やパフォーミングアーツなどの技術的な開発を行っている。また、これに関連してメディアテクノロジーを芸術表現および教育プログラムへ応用するための研究に取り組んでいる。これまで、メディアリテラシー&身体表現をテーマとしてオリジナルワークショップを数多く開発しており、今回の「コロガル公園 in ネイチャー」は、YCAM 館内・屋外パビリオンのために2年間をかけてオリジナルで開発研究したプロジェクトを、札幌の大通公園の地域に応用的にアサインして公開を試みるものである。

#### ■五十嵐 淳

1970年北海道生まれ。1997年株式会社五十嵐淳建築設計事務所設立。2005～2010年北海道工業大学非常勤講師。2006～2008年東北大学非常勤講師。2006～2013年名古屋工業大学非常勤講師。2012年オーストリア建築大学客員教授。2013年慶應義塾大学非常勤講師。主な受賞歴は日本建築学会北海道建築奨励賞、第19回古岡賞、大阪現代演劇祭仮設劇場コンペ最優秀賞、第3回カナダグリーンデザイン賞最優秀賞、第1回木質建築空間デザインコンテスト最優秀賞、BARBARA CAPPOCHIN ビエンナーレ国際建築賞グランプリ (イタリア)、Best of Residential グランプリ受賞 (アメリカ)、JIA 新人賞、JIA 北海道支部住宅部会大賞、北海道建築賞。主著に『五十嵐淳 / 状態の表示』(彰国社、2010)、『五十嵐淳 / 状態の構築』(TOTO 出版、2011)。

A-050



五十嵐 淳

### ■暮らしかた冒険家 [hey, sapporo] Lifestyle Adventurer [hey, sapporo]

A-051



暮らしかた冒険家  
池田 秀紀・伊藤 菜衣子  
© 暮らしかた冒険家

### 暮らしかた冒険家 池田 秀紀・伊藤 菜衣子

Lifestyle Adventurer : Hidenori Ikeda, Saiko Ito

会場未定

暮らしかた冒険家は、ウェブデベロッパー 池田秀紀 (1980年 千葉生まれ)、写真家 伊藤菜衣子 (1983年 札幌生まれ、茅ヶ崎育ち) による夫婦ユニット。夫の池田秀紀は、神奈川、埼玉、東京と、引越しの多い家庭に育つ。大学在学中に独学でプログラミングを習得。卒業後は広告代理店、田中浩也研究室を経て、2006年よりフリーランスのウェブデベロッパーとして活動中。妻の伊藤菜衣子は、2004年写真新世紀入賞。デザイン事務所のマネジメント、撮影スタジオアシスタントを経て2006年独立。写真だけにとどまることなく、草の根ムーブメントのデザイン、ウェブのディレクションも手がける。

東日本大震災のあと熊本市で見つけた古い民家をリノベーション、その作業中から現在に至るまで自分たちの暮らしかたを冒険、発信していま大きな注目を集めている。

二人は、「私たちの暮らしはいつだって不安だったのかもしれない。だから進化してきたのかもしれない。いまある社会の問題と向き合って、私たちがこれからどんな暮らしかたがしあわせなのか?を模索してゆきます。」という宣言のもと、高品質低空飛行生活をモットーに結婚式や新婚旅行、住居などの「これからのあたりまえ」を模索する。主な仕事に、100万人のキャンドルナイト、坂本龍一氏のソーシャルプロジェクトなどのムーブメント作りのためのウェブサイトやメインビジュアルの制作、ソーシャルメディアを使った広告展開など。

### ■坂本 龍一 ウェルカムサウンド Ryuichi Sakamoto - Welcome Sound

A-026



©2011 Kab Inc.  
Photography by Rama

### 坂本 龍一 Ryuichi Sakamoto

新千歳空港

→ P007 参照



創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会  
<http://www.sapporo-internationalartfestival.jp>

●お問い合わせ先 ※ 広報用画像のお申し込みは、下記宛先までご連絡ください。

---

**創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会 国際芸術祭事務局**

〒060-8611 札幌市中央区北1条西2丁目 札幌市観光文化局国際芸術祭担当部内

TEL : 011-211-2314 / FAX : 011-218-5154

E-mail : [press@siaf.jp](mailto:press@siaf.jp)